

第 章
学 生

第 章 学生

第 1 節 アドミッションポリシー（受入れ方針、入学者選抜方針）とその適切な運用

（ 1 ）事実の説明（現状）

アドミッションポリシーとその公開

大学専攻科のアドミッションポリシーは、教育目的である「専門技術研究の発展」、
「社会の音楽活動に直結した実践的性格」を基本とし、この教育目的にふさわしい入学者の選抜と受け入れをはかることにある。

大学専攻科は例年、主として大学 4 年生を対象に入試ガイダンスを 7 月に行なっている（2005 年度は 10 月）。その際には、本専攻科のアドミッションポリシーについて述べ、専攻横断授業としての特別演奏実習（オータム・コンサート）が最大の特徴であることなどを説明している。

アドミッションポリシーに沿った入試要件、入学試験等の適切な運用

一般入試による選抜を行っている。推薦・A0 選抜は行なっていない。試験科目は、専攻実技審査のみである。2005 年度入試の概要は下記の通りである。

表 6 2005 年度 専攻科入試要項

出願期間	2005 年 1 月 20 日（木）～1 月 26 日（水）必着	
試験期日	2005 年 2 月 22 日（火）、23 日（水）	
合格発表・方法	2005 年 2 月 24 日（木）16 時より学内掲示にて発表。	
試験方法	<ul style="list-style-type: none"> ・入試当日の入室番号制による実技審査を行なう。 ・採点は各専攻専任教員全員が担当し、作曲、音楽学、指揮、演出、管弦打は × の 3 段階評価、声楽、ピアノ、オルガン、箏は 100 点法とし、採点の合計を平均し、専門点とする。 	
出願資格	<ol style="list-style-type: none"> 1. 4 年制大学音楽学部（音楽に関する課程を含む）を卒業した者、または 2005 年 3 月卒業見込の者。 2. 本学において第 1 項と同等の資格を有すると認められた者。 	
募集人員	作曲専攻（作曲・音楽学・指揮）	2 名
	声楽専攻（声楽・演出）	3 名
	器楽専攻（ピアノ・オルガン・管楽器・弦楽器・打楽器・邦楽）	5 名
	計	10 名
修業年限	1 年	

収容定員と入学定員等、在籍学生数とその適切な管理

専攻実技を重視する教育体制は変わっていない。また、毎年一定の入学者が確保出来ている。

表7に2003年度以降の出願者数、合格者数、入学者数、表8に在籍学生数と収容定員を示す。

表7 志願者数、合格者数、入学者数（2003～2005年度）

専攻		2003年度			2004年度			2005年度		
		志	合	入	志	合	入	志	合	入
作曲専攻	作曲	0	0	0	0	-	0	0	-	0
	楽理*	0	0	0	0	-	0	0	-	0
	指揮	2	2	2	0	-	0	1	0	0
声楽専攻	声楽	28	12	12	23	11	11	23	11	11
	演出	0	-	-	1	1	1	0	-	0
小計		25	10	10	15	11	11	14	11	11
器楽専攻	ピアノ	20	8	8	11	7	7	10	7	7
	オルガン	0	-	-	0	-	0	0	-	0
	管楽器	1	0	0	2	2	2	4	4	4
	弦楽器	2	0	0	1	1	1	0	-	0
	打楽器	0	-	-	0	-	0	0	-	0
	箏**	2	2	2	1	1	1	0	-	0
合計		55	24	24	38	23	23	38	22	22

志：志願者数、合：合格者数、入：入学者数、*：2005年4月より音楽学に名称変更、**：2005年4月より邦楽に名称変更

表8 在籍学生数と収容定員（2003～2005年度）

年度	在籍学生数 (人)	収容定員数 (人)	比率(在籍学生数/収容定員数)
2003年度	24	10	240%
2004年度	23	10	230%
2005年度	22	10	220%

(2) 第1節の自己評価

広報誌「Muse(ミューズ)」には受験情報が掲載され、入試ガイダンス日程、入試結果等も詳しく記載されている。また、教育目標が大学案内や入試ガイダンスでも説明されている。更に、疑問点に関しては入試広報デスクが受け付けており、受験生に対するアナウンスはほぼ万全と言える。

(3) 第1節の改善・向上方策(将来計画)

一定した志願者数を得られていることは喜ばしいが、外部からの志願者に対し、より明確に大学専攻科の教育目標を伝える機会を設定すべきであるといえる。

第2節 学習支援体制の整備状況

(1) 事実の説明(現状)

学生に対する学習支援体制の整備及び適切な運営状況

大学専攻科では例年4月に新入生に対しガイダンスを実施している。前年度の進学希望者ガイダンスで述べた内容を再度説明し、履修に就いても無理のない学修計画を立てるよう指導している。その際、学生便覧(本学の沿革、組織、学則、履修課程、授業内容などが記載)、講義概要(各科目のシラバス、担当教員名、単位数、成績評価方法などについて)、Campus Guide(学生生活の案内、受講登録の方法)時間割表等が配布され、1年間の学生生活全般における概要は把握出来るようになっている。

学生の学習支援に対する意見等を汲み上げるシステム

履修相談窓口は常時開設されている。年2回の出席状況調査、学生個々に対し相談があれば学務事務部門(学生生活担当)及び学生部長が対応すること等、併設教育機関と同様の整備がされている。

また、年度末には1年間の授業を振り返り満足度を中心とした大学専攻科独自のアンケート調査を実施している。

(2) 第2節の自己評価

学生の学習支援に対する体制は各事務部門の支えもあり、十分に機能していると判断できる。専門技術研究が主たるテーマであることから、実技担当教員との関わりにおいて学習上の問題点や悩みは解決していることが多いと言える。

(3) 第2節の改善・向上方策(将来計画)

大学専攻科は1年のコースであり、年度末にアンケート調査を実施し、改善点を見出している。

少しでも充実した学生を支援する為、少なくとも年度途中のアンケート調査を実施することについて検討する必要がある。

第3節 学生サービス

(1) 事実の説明(現状)

学生サービス、厚生補導のための組織とその運用の適切性

教職員の組織として、学生生活委員会を月1回開催し、学生生活に於ける様々な問題について検討している。また、日常的に学務事務部門学生生活担当及び学生部長が学生の相談に当たっている。大学専攻科の学生が話し合いや練習の為に自由に使用出来る専

用の部屋としてF館317、320の2部屋が設けられている。

併設教育機関の共用施設であるアメニティスペースとしての学生サロン「ばうぜ」（兼食堂）には、2階にグランドピアノ（ベーゼンドルファー）が常設されサロンコンサート形式の演奏会が開催出来るようになっている（開催希望の場合は、その1ヶ月前までに学務センターへ申し込まなければならない）。また、同フロアには、文具や日用品、軽食などを扱うミニ・コンビニを設置している。

N号館1階には（株）ヤマハミュージック大阪のヤマハ売店を設け、楽譜や楽書、管弦打楽器の小物等を販売している。

学生に対する経済的な支援

大学専攻科の学生に対する奨学金として、大阪音楽大学奨学事業財団奨学金・奨励金、日本育英会（日本学生支援機構）奨学金、地方公共団体奨学金があり、例年4月上旬に資格審査を行い若干名が採用される。

表9に大学専攻科における奨学金受給者数状況を示す。

表9 大学専攻科における奨学金受給者数状況

		2003年度	2004年度	2005年度
奨学金制度	学生支援機構（一）	4	0	4
	学生支援機構（二）	2	1	2
	大 学	0	0	0
合 計（人）		6	1	6
在籍学生数（人）		24	23	22

学生支援機構（一）：日本育英会 第一種奨学金、学生支援機構（二）：日本育英会 第二種奨学金、大学：大阪音楽大学奨学事業財団奨学金

各奨学金・奨励金の概要を以下に示す。

大阪音楽大学奨学事業財団奨学金

この財団は本学後援会、同窓会《幸楽会》の援助金やその他一般の寄付金によって運営し無利子の奨学金の貸与を受けている。

月 額：45,000円

募集時期：4月上旬

期 間：採用年度のみ（1年間、毎年度申請による継続可）

資 格：人物、学業共に優れており、家庭の経済事情により就学が困難なもの

人 数：若干名

返 還：貸与終了後の翌月から換算して6ヶ月後から20年以内

日本育英会（日本学生支援機構）奨学金

日本育英会奨学金は国家予算により貸与されるもので、人物・健康・学力・家計が選考の基準になっている。貸与される奨学金には「第一種奨学金」（無利子貸与）と「第二種奨学金」（きぼう 21 プラン）（有利子貸与）の 2 種類がある。

<第一種奨学金>

月 額：52,000 円
募集時期：4 月上旬
期 間：最短修業期間
資 格：経済的理由により修学に困難がある優れた学生
人 数：若干名（在学採用）
返 還：貸与金額により返還期間は異なる

<第二種奨学金>（きぼう 21 プラン）

月 額：30,000 円/50,000 円/80,000 円/100,000 円 より選択
募集時期：4 月上旬
期 間：最短修業期間
資 格：経済的理由により修業に困難がある優れた学生
人 数：若干名
返 還：貸与金額により返還期間は異なる。利息は年利上限 3%

大阪音楽大学奨学事業財団奨励金

海外留学、国内外音楽コンクール入賞、国内外音楽講習会等に参加する学生に対して援助を行う。

種類：海外留学奨励金、海外・国内音楽講習会参加奨励金、海外・国内音楽コンクール参加奨励金（原則として入賞者）、その他奨励事項奨励金。

資 格：学業・成績共に優れている者
回 数：該当年度において一人につき一回限り

音楽社会活動賞

2003 年度に制定された奨学制度で、音楽を通じた継続的なボランティア活動や、創造的な音楽活動（コンクールは対象外とする）を表彰する。

対 象：全在学生（最終学年の学生に限る）
人 数：制限なし
表 彰：卒業式において学長より表彰状及び記念品を授与し、その功績を称える。
（金銭の支援はない）

これらの他に地方公共団体が行う奨学制度や民間育英会団体が行う奨学制度もある。

これらについてはH号館下奨学金掲示板にて掲示案内をしている。

音楽文化振興財団による学生自立活動への助成金

- ・ 演奏会や発表会など全て学生の手で行う自主的な活動に対して本学の音楽文化振興財団が助成を行っている。
- ・ 学生の音楽活動を支援する目的で、自主公演による演奏会に助成金を拠出するものである。
- ・ 本学学生に還しうる音楽文化振興事業を主とし、地域及び教育機関における音楽文化振興などを実施している。また、本学学生が主体となり、学生自身が主催する課外活動の公演及び演奏会等の会場使用料や業者に支払うべき費用等の助成を行っている。

音楽文化振興財団の適用例を表 10 に示す。

表 10 音楽文化振興財団の適用例

○ 2003 年度、2004 年度 大学専攻科の学生が主催した演奏会への助成

月 日	演奏会名	助成額
2003 年 11 月 15 日	加藤英雄ピアノ・リサイタル	¥30,000
2004 年 7 月 23 日	学専声楽専攻生による Summer Concert	¥10,000

2005 年度は大学専攻科の学生が主催した演奏会を助成した実績はなし。

○ 2003 年度 大学専攻科の学生の助成対象演奏会への参加

月 日	演奏会名	参加人数
2003 年 7 月 11、12 日	歌劇「La Boheme」	2 名
2003 年 10 月 21 日	演奏会形式ミュージカル「レ・ミゼラブル」	2 名

2004 年度、2005 年度は大学専攻科の学生の助成対象演奏会への参加はなし。

学生に対する課外活動への支援

専攻科を含む大学・短大において、現在、5つのクラブ、11の同窓会が存在し、これらは学生自治会により案内されている。大学生活の中で課外活動に参加することは人間形成上、意義深いこととされているが、大学専攻科は一年の教育課程であることと、専攻別の自主活動や企画、運営、演奏会全てを専攻横断型で取り組む特別演奏実習の為、課外活動に費やす時間を見出せないのが現状である。

学生に対する健康相談、心的支援、生活相談等の適切な運用

健康相談

毎年4月に全学的に健康診断を実施している。日常的な健康相談、応急処置は保健室にて行っている。表 11 に大学専攻科における保健室の利用状況、表 12 に健康診断の受

診状況を示す。

表 11 大学専攻科における保健室の利用状況

年 度	2003 年度	2004 年度	2005 年度
延べ利用者数(人)	11	37	11
ベッド利用者数(人)	1	7	3

表 12 大学専攻科における定期健康診断の受診状況

年 度	2003 年度	2004 年度	2005 年度
対象者数(人)	24	23	22
受信者数(人)	17	18	19
受診率(%)	70.8	78.3	86.4

保険について

大学が加入している(保険料は大学が負担)「学生教育研究災害傷害保険」、個人負担による任意保険学生総合保障制度「こども総合保険」等についてガイダンス時にアナウンスしている。2003～2005 年度において任意保険に加入している大学専攻科生はいない。

心的支援

メンタルケアとして学務センターに学生相談室や心の相談室が設置されている。後者に関しては専門のカウンセラーが来校し、希望者にカウンセリングを行っている(毎月第2月曜日、第4水曜日)。

キャンパス・ハラスメント相談

昨今、セクシャル・ハラスメントのみならず、他の様々なハラスメント(アカデミック、アルコール、パワー等)に対する対応が本学でも取り上げられるようになった。これらキャンパス・ハラスメントに対応するための専属相談員を配置し(ハラスメント相談員:教員3名、職員2名)学生からの相談を受け付けている。この相談員とは直接専用携帯電話や電子メールにて相談することが出来る。

専用携帯電話番号やメールアドレスについてはH号館下学務センターや学生サロン「ぱうぜ」(兼食堂)の掲示板にて案内している。

学生サービスに対する学生の意見を汲み上げるシステム

学生の意見を汲み上げるシステムとしては、第 4 章.第 2 節. と同様のシステムによって行われている。

(2) 第3節の自己評価

学生の厚生補導の為に組織体制は良好に機能している。経済的支援体制も整備されているが、奨学金受給者数は表9のようにそれ程多くない。音楽文化振興財団の適用例は表10の通り数件存在しているが、2003年度から導入された音楽社会活動賞は適用された例が2005年度までの間で大学専攻科には未だない。

大半の学生が個人技の向上をテーマに日々切磋琢磨していることから自ら健康管理には留意しているようである。年々健康診断の受診率が向上していることは興味深い現象と言える。一方で任意保険への加入者は見当たらず、不測の事態も考慮し、加入を勧めるべきである。

(3) 第3節の改善・向上方策(将来計画)

大学専攻科のみが行っている特別演奏実習(オータム・コンサート)は学生達の一年間の大きなテーマとなっているが、各専攻生達が集結し練習を積み上げていく環境(固定された大教室)が現段階では存在しない。より確実性のある連携プレーを創造する意味においても相応しい環境を確保したい。

演習系の授業が多く、また学外での活動も行うことから、一層健康管理に留意させたい。

大学専攻科学生が学務センターで相談するケースは少ないが、これは学生個々の担当教員がレッスンを通じてメンタルケアを行っているためと考えられる。

第4節 就職・進学支援

(1) 事実の説明(現状)

就職・進学に対する相談・助言体制の整備状況とその適切な運営
就職支援体制

エクステンション事業委員会が学生の就職支援を司っている。この組織はエクステンションセンター長、同事務部門長、担当教員(2003年度5名、2004・2005年度4名)、担当理事1名で構成され、就職支援の為に審議を行っている。更にエクステンション事業の事務的補助機関としてエクステンションセンターを設置している。

エクステンションセンターが就職支援の為に催している説明会・講習等は次の通りである。

- ・ 進路説明会(例年10月)
- ・ 進路支援セミナー(例年10月)
- ・ 就職の為にガイダンス(例年12月、1月)
- ・ 教員採用試験受験対策説明会(例年10,12,2,3月)
- ・ 就職支援講座(例年1,3月)
- ・ 公務員採用試験受験対策説明会(例年12月)
- ・ 音楽教育講師採用説明会(例年11,12,3,5,6月)

これら説明会・講習会に加えてホームページで就職情報を案内している(大学専攻科

入学生には前年度修了生の進路状況や就職活動支援案内を掲載したエクステンションインフォメーションが配布されている。

進学支援体制

大学専攻科を修了することで、専門技術研究に対する充実感は得られ、これより先への進学は割合としては少ない。

更なる向上を目指し大学院（同一法人内、他大学）か外国留学が考えられる。進学における支援体制としては、大阪音楽大学大学院進学希望者ガイダンス（4月）、留学情報の収集と掲示による広報、情報収集用のパソコンの設置により行っている。

進路（就職・進学等）状況

2003～2005年度の進路（就職・進学等）状況を表13に示す。

表13 大学専攻科における進路（就職・進学等）状況（2003～2005年度）

		2003年度		2004年度		2005年度	
		(人)	(%)	(人)	(%)	(人)	(%)
就 職	音楽教室（企業）講師	4	16.7	3	13.0	2	9.1
	音楽教室（自営）講師	1	4.2	2	8.7	3	13.6
	演奏活動	3	12.5	1	4.4	4	18.2
	企業			2	8.7	2	9.1
	教員	5	20.8	3	13.0	1	4.6
	公務員						
	その他			1	4.4		
小計		13	54.2	12	52.2	12	54.5
進 学	大学院	1	4.2	2	8.7	0	0
	留学	0	0	1	4.3	0	0
	その他	0	0	1	4.3	0	0
小計		1	4.2	4	17.4	0	0
そ の 他	アルバイト	5	20.8	2	8.7	0	0
	フリーター			1	4.3	5	22.7
	進学・留学準備	4	16.7	3	13.0	0	0
	その他	1	4.2	1	4.3	2	9.1
小計		10	41.7	7	30.3	7	31.8
回答者数		24		23		19	
修了者数		24		23		22	

インターンシップや資格取得等のキャリア教育のための支援体制

エクステンションセンターが開催している資格取得講座に大学専攻科生のみを対象にしたものではなく、併設教育機関における全学年、卒業生を含めて対象としている。将

来の音楽活動や一般企業への就職に役立つ資格取得の為、パソコン資格取得準備講座、音楽指導グレード取得講座、ホームヘルパー養成（2級）講座、（2005年より秘書検定2級対策講座）を開催している。また、インターンシップに就いてもエクステンションセンターを窓口とし、主に音楽関係の企業へ受入れを申し入れている。

ただ、大学専攻科の科目として「インターンシップ特別実習」が設置されていない為、単位認定対象とならないのが現状である。

（2）第4節の自己評価

進路支援体制は整備され、適切に運営されていると言えるが、大学専攻科生も対象となっている進路説明会や就職ガイダンス等、更に資格取得講座への出席は2003年度から2005年度において見られない。これは大半の学生が将来への進路に興味を抱きながらも、日々、課せられた演習や個人研究に時間と労力を費やし、就職活動にまで目を向けるゆとりがないからと言える。

2003年度から2005年度における実際の就職率を見ると（表13参照）ほぼ同じ就職率を示す。約50%の学生が就職しているが、残りの50%の学生は音楽活動を優先させる環境を求めているようである。

（3）第4節の改善、向上策（将来計画）

演奏等の専門家、音楽関連産業等の専門就職および一般就職への支援を行っている。専門性を磨く一年が就職を意識する貴重な一年でもあることを、より具体的にアナウンスしていくべきであろう。各種説明会、ガイダンスへの参加及び資格取得講座への参加、更にインターンシップとしての就業体験も有効な手立てと考えられる。

〔第 章の自己評価〕

学習支援は学務事務部門等の活動により、適切に行われている。経済的支援、健康管理面等に対しても組織的な取り組みにより円滑な活動が行われている。就職支援体制は整備され、適切に運営されているが、大学専攻科のみに対する支援活動がないことと、自己の専門性の追求に時間を費やすことにより教職に向けて積極的に活動し得ないことから十分な成果を得るにはいたっていない。

〔第 章の改善・向上方策（将来計画）〕

ある程度一定した志願者を得てきている。特に現状の入試体制を変更する必要はない。しかし、外部受験者に対しては、事前に大学専攻科についての教育目標やアドミッションポリシー等の理解を更に促すべく進学ガイダンスの回数を増やすべきであろう。

芸術系の大学が抱える共通した悩みとも思えるが、自己の芸術性を探求することが必ずしも就職に結び付くとは言えない。しかしながら、そのことを理解する一方で、就職にもより積極的に目を向ける支援体制を強化すべきである。その為にも資格取得、インターンシップ制度も利用して学生個々が自らの可能性を高められるよう支援していかねばならない。